

ニュージーランド・オークランド市で「教育改革」調査

2009年12月14日



ニュージーランドに到着しました。きょう、成田からの直行便で降り立ったのはニュージーランド北島の北部にある都市・オークランド市。南半球の季節は初夏。とてもさわやかに感じます。

ニュージーランドの面積は日本の4分の3。人口は432万人で大阪府民の半分です。長年、酪農品を輸出することを基本にした経済政策をとってきました。人々はおお

らかにやさしく、特別に金持ちにならなくてもいい、家の近くで働いて暮らせればいいという気風が支配的だったといいます。

ところが、20年ほど前に、「規制緩和・市場原理主義・民営化」路線を日本に先駆けて採り入れて以降、ニュージーランドの人々の雰囲気が大きく変わった、競争的で、顔つきまで変わった、と20年前のニュージーランドと今日のニュージーランドをよく知る人から聞きました。

そのニュージーランドでも、行き過ぎた規制緩和路線の是正、たとえば、いったん郵政を民営化したものの、国民の金融機関がなくなってしまう、買い戻して国営のキウイバンクを設立するなどの動きも起こっています。



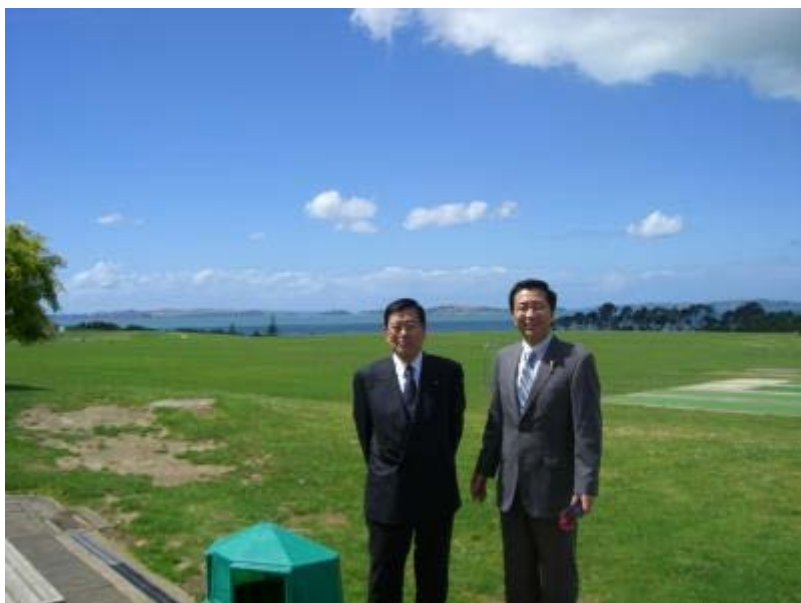
少し遅れて同じ道に進んだ日本でも、行き過ぎた規制緩和・民営化路線が総選挙で国民の審判を受け、郵政民営化の見直しが始まったことは、偶然ではなく、世界の流れなのでしょう。

★というわけで、大変興味深い国なのですが、今回の調査目的は「教育改革」です。まずは、教育省オークランド事務所を訪ね、アディン所長にお話を伺いました。

ニュージーランドでは、1989年に大掛かりな「教育改革」が行われました。その柱は2つあるようです。ひとつは、教育委員会制度を廃止して、各小・中・高校ごとに「学校運営理事会」(Board of Trustees, BOT) を設けたこと。各 BOT は、保護者代表 5 人、校長、教職員代表 1 人、生徒代表(高校のみ) 1 人から構成されます。BOT の役割は、教育カリキュラムの作成、教職員の採用、学校予算の立案・運用などで、とても大きな権限があります。

もうひとつは、それまで高校の卒業資格試験の合格率を 50%程度にしていたことを改め(以前は失敗しても高収入の就職先があったが、それがなくなってきた)、あらたな「教育達成度国家資格」(National Certificate of Educational Achievement, NCEA)を導入したこと。これで生徒の 80%は成功したがもっと高くする必要がある、とくにマオリ、ポリネシア系の学生で失敗している人が多く、底上げをはかる必要があるとのことでした。

アディン所長自身「教育改革」当時、校長先生だったそうで、「地震のような大きな変化だった」といいます。こうした NZ の「教育改革」の成果や問題点については、これからの調査で見えてくればと思います。



★次に訪問したのは、マクレインズ・カレッジ(上の写真。日本の中学 2 年生から高校 3 年生までが学んでいます。佐藤泰介団長と)。ベントレイ校長が案内してくれました。小高い丘の上にある学校からは真っ青な海が眺望でき、広々とした芝生のグラウンドも美しく、とにかく素晴らしいロケーションです。



とで、学校財政の重要な部分となっています。

ニュージーランドでは97%の学校が公立だそうですが、高校までは授業料は無償(！)です。入学試験もなく(！！)、地域に住む子どもなら優先的に入学できます。これは日本と比べて文句なしにいい。保護者は、年間2万円~3万円の寄付金を払っているとのことでしたが、それでも日本の公立高校の授業料約12万円に比べればはるかに安い。ただし、積極的に受け入れている留学生の授業料は年間100万円ほ



全校生徒2500人(うち303人留学生)のマクレインズ・カレッジの教育で大きな特徴となっているのが「ファナウ・ハウス」(「ファナウ」とはマウイ語で「家」の意味)と呼ばれる制度。全校生徒を8つの「ハウス」に分け、入学してから卒業するまで(13歳から18歳まで)の5年間を同じ「ハウス」(建物)で学びます。5年間同じ「ハウス」で学ぶとシニアとジュニアの交流ができ、社会性やリーダーとしての役割も身につくのだそうです。

こうした特色ある教育内容を決めるのも「学校運営理事会」。ベントレイ校長は、「保護者代表の位置が非常に大事」「保護者の中の法律家、公認会計士、建築家など専門家からボランティアでアドバイスがもらえる」と語ります。

校長先生は、「なにより生徒のパフォーマンスが大事。生徒が試験に成功することだ」とも強調します。実際、海外のトップレベルの大学に合格するために、NCEAとは別のケンブリッジ国際試験を70%の生徒が受験するそうで、生徒の大学進学率はなんと97%(全国平均は40%)。超進学校です。

入学試験もない、地域の子ども優先の公立高校で、どうしてこんなことが可能なのか？教育内容と環境のなせる業なのか、それともこの学校のある地域の特殊性なのか？そこはまだよくわかりません。



★次に訪問したのは、オークランド日本語補修学校。オークランドに住んでいる日本人の子どもたち(小中学生)を中心に、日本の学校と同じ教科書を使って国語、算数、理科、社会を教えています。昼間は、地元の学校でニュージーランドの子どもたちと一緒に授業を受け、放課後、この学校にやってきます。ちょうど小学生の男の子が「年賀状」づくりをしていました。教室の壁には、子どもたちの将来の夢がいっぱい書いて

てありました。



海外で暮らす日本の子どもたち、日本とゆかりのある子どもたちに、日本語や日本の文化を教えることは、グローバル化・多様化する国際社会のなかで大変意義のあることだと思います。日本政府から教師の人員費は補助されていますが、ボランティアによる学校運営は苦しい。保護者が手作業で敷地の整備をしていました。もっと財政的な支援が必要だと感じました。

ニュージーランド2日目 首都ウェリントンでクリス・カーター前教育相と懇談

2009年12月15日

ニュージーランド「教育改革」調査2日目午前中、オークランドから飛行機に乗り1時間で首都ウェリントンへ。ニュージーランド北島の南端にあるウェリントンは港町でもあります。夏だというのに風は冷たく寒いくらいでした。南半球は南に下がるほど南極に近くなり気温が下がります。



さっそく、ニュージーランド教育省を訪ね、カレン・シウエル次官と面会。シウエル次官は教師出身で高校の校長も務めていたとのこと。ちょうど国会開会中で簡単なあいさつを交わして退席されました。

代わって、スティーブ・ベンソン教育省国際部シニアマネージャーから、ニュージーランドの「教育改革」について説明を受けました。



ベンソン氏の説明で印象深かった点は2つ。ひとつは、「ナショナル・カリキュラム」です。そこには“教師が何をどう教えるか”ではなく、“生徒にどうなってほしいか”が示されているといいます。

たとえば、「9～10歳」の子どもの「科学」のカリキュラムでは、①理解する力、②探

究する力、③科学の言葉で対話する力、④どうしたらいいか知っている知識、を子どもたちが身につけることが目標で、自分たちが生きている世界、つまり地球、宇宙、生物、物理、天文などが対象になる、という具合です。

「それをどのように教えるかは各教師に任されている」とのことでした。“生き物の一生はそれぞれに違うことを理解する”ために、魚と昆虫を使うのか、それともほかの生き物をつかうのかは教師が自分で選択します。

こうした「ナショナル・カリキュラム」は、教師や専門家の意見を広く取り入れ、原案から3年かけてつくられたそうで、「教師にも人気が高い」らしい。日本の「学習指導要領」とはだいぶちがうようです。

ベンソン氏の話で興味深かったふたつ目は、「ニュージーランドが『教育改革』にとりくむことになったキッカケはなにか？」との問いに対する答えです。氏は笑いながら「ほとんど忘れまして」と答えました。



そして、20年前の「ピコ・レポート」(教育に関するレポート)では事務的な面での改革が強調された。たとえば学校の窓ガラスが割れた場合、政府機関に要請しなくても各学校で交換できるようにした。ようやくいま、「学ぶこと」「教えること」が改革の焦点になってきた、と説明してくれました。

話を聞きながら、“ニュージーランドの「教育改革」とはこういうものだ”と決めつけるのは正しくないのではないか？常に子どもたちを前進させるために、変革し続けていく姿勢こそ真髄ではないか？と感じました。



★その後、全国学校運営理事会協議会のレイ・ニューポート事務局長を訪ねました。全国2600の学校にある学校運営理事会(BOT)に、理事を選挙で選ぶ方法(3年に1度全国で一斉に選挙が行われます)や、教師の採用、校長と住民の協力な

どをアドバイスしているとのことでした。



★続いてニュージーランド国会へ。クリス・カーター前教育大臣(労働党)と懇談しました。カーター氏は、一院制のニュージーランド国会に5回当選。政権交代が起こる08年11月までの18カ月間、教育大臣を務めました。現在も国会議員です。政界入り前は、16年間中学・高校の教師をしていたそうで、穏やかな話しぶりの中にも、教育への深い思いが伝わってきます。

カーター氏は、1980年代に様々な規制緩和が行われ、学校に関してもロンギ首相によって、①地域の方がもっと学校にかかわるようにしよう、②カリキュラムや資金分配も改革しよう、という2本柱で「教育改革」が提起されたといいます。

9年間かけて、校長の給与を42%、教師の給与を36%も引き上げたと聞いてびっくり。カーター氏は、「いちばん大事なのは教師です。質のよい教育は、訓練された教師がいるかどうかで決まります」といいました。まさに教育という営みの真理だろうと思います。

教育大臣として、「あなたの学校で誇りに思っていることを聞かせてください」と300の学校を飛び込みで訪問したというカーター氏の言葉には重みがありました。

私が、「ニュージーランドの『教育改革』」について2つの感想を持ちました。子どもの発達が中心にあることと、改革には終わりが無いことです。制度の改革から、学ぶこと・教えることの改革へと発展しているんだなと思いました」と述べると、カーター氏は、「そうです。終わりはありません」とにっこり。



子どもたちの発達のために、私たち大人が努力して最もよい環境を提供することに国境はありません。大変有意義な懇談となりました。



ニュージーランド国会議事堂前で記念撮影。佐藤団長、高橋利弘・在ニュージーランド大使と。



【きょうのおまけ これがキウイバンクだ！】



民営化した郵便貯金をニュージーランド政府が買い戻してつくられたキウイバンク。ぜひ覗いてみたいと探していたのですがウェリントン市内で見つけました。

看板には、民営化された「post bank」の文字の上から緑色の「kiwi」のロゴが貼り付けられていました。

各種パンフレットにはすべて「kiwi bank It's ours」(キウイバンク 私たちの銀行です)と記されています。

ニュージーランド国会教育科学委員長と懇談 オーストラリアへ

2009年12月16日



ニュージーランド「教育改革」調査3日目。まず教育評価庁(Education Review Office, ERO)を視察。グラハム・ストープ長官とジェニー・クラーク女史が応対してくれました。

EROは、教育省から独立した行政機関で、ニュージーランドの各学校の評価を行い、結果を公表しています。

評価の基準は6つあります。①学校の運営——学校運営理事会(BOT)がうまく機能しているか、②学校のマネジメント——校長や教頭がリーダーシップをとれているか、③カリキュラム——どのように実施されているか、学ぶ・教えるがうまくいっているか、④自己評価——まずこれが大事、EROはその欠点を補う、⑤コミュニティー——保護者と協力できているか、⑥生徒がどれだけ成果を上げているか——これがもっとも重要、とのことでした。

6つの基準ごとに「質問項目」があり、それを使って評価を行います。すべての学校は3年に1度評価を受けます。EROには250人のスタッフがおり、各学校について評価レポートが書かれ、ウェブサイトで公表されます。人口400万人のニュージーランドで、100万回のアクセスがあり、人々の関心は非常に高い。学校の評価について問い合わせの電話も多いといいます。

私は、「ひとつ心配な点がある。結果が公表されたら、保護者は問題のある学校を避けるようにならないか？成績のよい学校に子どもを入れるために、引越す保護者が出るのではないか？」と質問。

ストープ長官は、「そういうこともある」と認めたくて、「なぜ学校を評価するか、それ



は子どもたちに最善の教育を提供するためだ」と回答。クラーク女史も、「評価基準を示したパンフレットの1ページ目に“子どもが中心”と書いてある」と説明。

「成績を数値で公表したら、学校の序列化にならないか？」との再度の問いに対しては、「学力だけの序列化はしない」「BOTは校長から生徒に関して、とくに成績に関して詳しい情報をもらう。そして、どう財源を分配するか考える。これがBOTの一番の仕事」「住民が地元の学校に興味があることが一番大事」などの答えが返ってきました。

今朝のニュージーランドの新聞に、ある校長が生徒の試験結果を改ざんして報告していたことが発覚した、と報じられていましたが、学校ごとに成績を数値で公表するやり方は、まったく問題なしではなさそうです。



★続いて、ニュージーランド最後の日程、アラン・ピーチャー・ニュージーランド国会教育科学委員会委員長(国民党・当選2回)との懇談です。

ピーチャー委員長も元教師で、ニュージーランド最大の高校の校長も務めました。ピーチャー委員長は、「学校に自決権と責任をもたせた『教育改革』は大変よかった。教育に競争があることはいいことだ。私の学校がよくなったらまわりの学校もよくなった」といいます。ニュージーランドの「教育改革」は様々な立場から様々な評価がされているようです。

ピーチャー委員長には学費のことを聞いてみました。ニュージーランドの公立高校の授業料は無料。私学もありますが9割の生徒は公立高校に通っているとのことでした。

大学はすべて公立。学部によって授業料は違いますが、一番高い医学部でも年間



50万円ほどで、他の学部は日本の国立大学よりかなり安い。ほぼ100%の学生が国の教育ローン(無利子)を利用しており、卒業後一定の収入(年100万円ほど)に達すると収入に応じた返済をはじめます。それとは別に、生活手当(給付制)が支給されるので、親の負担は日本よりうんと少なく、多くの学生は親の経済的支援なしに大学に進学するようです。教育費の負担が平均年収の3割にもなる日本とはえらい違いです。

【きょうのおまけ NZ国会本会議場で発言！？】



ピーチー委員長との懇談後、ニュージーランド国会のなかを案内してもらいました。本会議場は日本のそれよりかなり狭く、野党と与党が対面で座る英国式。



議長が着席している間、中央のテーブルの上には装飾の施された棍棒のような武器が置かれます。議場を平定するための象徴だそうでこれも英国議会と同じだそうです。



ついに、ニュージーランド国会本会議でも発言…のマネをさせていただきました。

ということで、ニュージーランドの「教育改革」の調査は終了。次の調査地、オーストラリアに空路向かいました。ニュージーランド空港で食べたキウイ・フルーツは、完熟でやわらかくとても甘かった。硬くてすっぱいイメージの日本で食べるキウイとは別物のようでした。



★オーストラリア最大の都市シドニーは高層ビルが立ち並ぶ大都会。総領事公邸で、現地の日本人学校、日本語補修学校の関係者のみなさんと懇談。日本への帰国を前提とする長期滞在者の子どもには日本政府から補助が出るのに、日本国籍を持つ永住者にはまったく支援がないことなど、具体的な要望も聞かせていただきました。各国の取り組みも研究してみたいと思います。

オーストラリア・シドニーで NSW 州教育省を訪問 首都キャンベラへ

2009 年 12 月 17 日

昨日やってきたオーストラリアの面積は日本の約 20 倍、人口は 6 分の 1。広大な土地ですが、内陸部は荒涼たる砂漠地帯で、人々は大陸周辺部にへばりつくように住んでいます。首都は人口 30 万人余のキャンベラ。キャンベラから 300 キロメートルほど離れたシドニーは経済の中心地です。ここから川上善博議員（民主）が合流。



★まずは、シドニー日本人学校を訪問。新見校長、青山ゼネラルマネージャーらに案内してもらいました。現在シドニーには500人ほどの学齢期の子どもがいますが、日本人学校に在籍しているのは約100人、残りは地元校に通っています。



12名の教師は全員、日本から3年の期限で派遣される公立学校の教師。人数不足、予算不足で、長時間勤務、休日出勤が常態化しているようです。アルコールランプを日本から取り寄せるなど、帰国後も子どもたちが困らないようにしているとのことでした。

★ところで、オーストラリアは6州、北部準州、首都特別区からなる連邦制を敷いています。憲法上、教育は州の責任とされます。シドニーのあるニュー・サウス・ウェールズ州の教育訓練省を訪ねました。

説明してくれたのはジェニー・シップさん。あらゆる学校の教育の柱に「多文化主義」を掲げており、各学校に配られるカレンダーには、世界中の国の特別な日、主な宗教の特別な日を書き込まれているとのことでした。5人に1人が外国生まれで、4人に1人が自宅では英語以外の言葉を使っているNSW州にとっては必要不可欠な方針なのでしよう。



ニュージーランドとは違い、学校の財務や人事は州政府が所管しているとのことでした。また、NAPLANと呼ばれる「読み書き計算」のテストが、8歳、10歳、12歳、14歳で行われます。結果は、教師、保護者に伝えられ、州平均を下回る子どもには特別のプログラムをつくり能力を上げなければならない、とのことでした。

私からは小・中・高校の1クラスの人数を質問。シップさんは、幼稚園は20人以下、1年生は22人以下、2年生は24人以下、残りの小学校は30人以下、中学校は30人以下、高校は24人以下だと教えてくれました。とくに、小学校1、2年生については、「はじめの3年間は非常に大事」との理由で7~8年前から30人から20人台に減らしたといいます。



公立の学校は高校まで無料ですが、私立は有料で、私立高校だと年間180万円程の授業料になるといいます。これは日本と比べても高い！

高校入試は「ない」そうですが、セレクトティブ・スクール(選抜中学校)に入学する時には試験があるとのこと。

大学入試も「ない」とのことですが、州ごとに実施される統一卒業試験の結果と、高校2年、3年の2学年の学業成績とを総合して、各自に得点が与えられ、この得点をもとにオーストラリア全土の大学内の席を巡って競争することになるようです。

けさのニュー・サウス・ウェールズ州の新聞は、ちょうどその成績を学校ごとに発表し、各科目の個人成績上位者をずらりと発表する何ページ建てもの特集が組まれていました。まるで、日本の『サンデー毎日』のようでした。



★午後、在シドニーの日本の新聞記者団に会見。夕方、シドニーを離れ空路、首都キャンベラへ。約1時間で到着しました。空港ビルを出るとムツとする暑さ。きょうのキャンベラは最高気温37度と聞いて納得。やはり南半球は夏真っ盛りです。

それにしても、広大な土地があるオーストラリアで、どうして経済の中心地と政治の中心地を分ける必要があるのか？聞くと、その昔、シドニーとメルボルンのどちらを首都にするかで争いがあり、最後まで話しがまとまらず、

中間にあるキャンベラを首都にしたそうです。日本でもひと頃「首都機能移転」が話題になりましたが、いちいち飛行機で移動するのはかなり不便。頓挫してよかった。

オーストラリア国会で上院・教育・雇用・労使関係委員会・前副委員長と懇談

2009年12月18日

オーストラリアの首都キャンベラでの「教育改革」調査。まずは、去年開校したハリソン・スクールを視察しました。4歳から12歳までの子どもたち540人が通っています。07年政権に就いたラッド首相が、アジア外交とアジア言語教育を重視する政策を打ち出したことを受け、この学校では日本語教育に力を入れています。



ダニス・ヤリントン校長が学校を案内してくれました。川上議員(民主)が、「日本では学習指導要領で“愛国心を養うように”とされているが、こちらではどうか？」と質問。ヤリントン校長は、「子どもたちには“良い市民”になるこ

とを教えます。70カ国の人がいるキャンベラでは、まず、“すべての人たちを受け入れる”ことを教え、そして、“良い市民”になることを教えます」と即答。素晴らしい答えに感激です。



事実、体育館の手作りのタペストリーには、「みんな一緒に」「公平に」など、この学校の原則を表す言葉が並んでいました。



1クラスの人数は平均21人。日本もたちにもこの環境を与えたいと思

広々と敷いた敷地に平屋建ての教室が並び、の子どもたち。

★次に、オーストラリア国会を訪問し、ギャリー・ハンフリーズ上院議員（教育・雇用・労使関係委員会・前副委員長）と懇談。ハンフリーズ上院議員は、各州ごとに違う就学年数やカリキュラムをそろえようとしていること、海外留学生の獲得に力を入れていること（なんと、海外留学生の受け入れはオーストラリアで3番目に大きい外貨獲得額だそうです！）などを説明してくれました。



私からは、1989年まで無料だった大学の学費が有料になった理由をたずねました。ハンフリーズ議員は、1970年代半ばに学費無料制度を導入したのは、低所得層の大学進学奨励策だったが、その層の進学がまったく増えず、高所得層への補助金になっているとして見直された、と説明してくれました。



だとすると、どうして低所得層の大学進学が増えなかったのか知りたいところですが、残念ながら時間がありませんでした。現在、多くの学生は、政府のローンを借りて、大学卒業後一定の収入となったときに返済する「後払い」方式を利用しているとのことでした。



懇談後、国会見学。写真は下院本会議場。



★続いて、連邦教育・雇用・労使関係省を訪問。バーマスタ-高等教育・青年・国際局長などから、ナショナル・カリキュラムづくり、アジア言語教育について説明を受けました。NSW州の新聞が特集した、学校ごと個人ごとの成績公表が、子どもや社会にどんな影響を与えているか、そうしたやり方をどう評価しているか聞きたかったのですが、これまた時間切れ。残念です。



★調査の最後は、「クエストコン」と呼ばれる国立科学技術センター。1988年、オーストラリア建国200年事業として建てられ、総工費の半分を日本政府や企業が負担しました。子どもたちに科学の面白さを体験してもらおう展示物がたくさんあってワクワクします。

私も空気砲を体験。

的の真ん中に当てるのはなかなか難しい。



時計回りに回転するシーソーのような遊具。板の重みでボールが男の子が



両端に乗った2人がキャッチボールが、回転によって生まれた遠球は曲がりうまく届きません。夢中になっていました。

暖かさと冷たさを手のひらで同時に感じると、感覚が敏感になり「熱っ、冷たっ」と不思議な体験ができる実験遊具。



オーストラリア各地で科学実験の移動展示ショーを開催するために、国立大学の学生15人が8隊で1年間キャラバンしているとのことでした。力が入っています。案内してくれたデュラント・ディレクターと。宇宙飛行士の毛利衛さん(日本科学未来館館長)は友人だそうです。



【きょうのおまけ 野生のカンガルーを発見！】



キャンベラ市街を眺望できる高台に上りました。戦争記念館、旧国会議事堂、新国会議事堂が一直線に並び、まさにつくられた首都です。



途中、野生のカンガルーを発見！ちょうどジャンプする姿を捉えることができました。

オーストラリアでは野生のカンガルーに出会うのは珍しくないそうです。

(了)